

者共はわけを存ぜず故彼是と申候。今度御暇被下候後御前に被爲召、在所へ罷歸ゆるくと休息も仕候様に、御直に蒙上意候。江戸にての退屈を在所にて直し申事に候。向後も其心得可仕旨にて、其後鷹野遊樂我儘のみに暮し被申候。右出羽守殿・丹羽殿・榊原殿并松代の城主眞田豊後守殿十四石四人の事は、當世の四天王と異名を付申候。畢竟好色より事起り吉原への被罷越候由。但眞田殿事は此方様御縁者に付、何れも御遠慮と相聞、病氣の躰に候旨に迄被申候。

一、有馬中務大輔の不愼

久留米城主有馬中務大輔殿則昌事、色々風説有之内、是は大道をも不構おどけ申事共數寄にて、當夏も芝の下屋敷へ客來有之、其内に御醫師吉田策庵老とやらん、暮頃被歸候節、迎の者共不罷越候處に、辻駕籠を才覺にて則打乘被罷歸候處、中務大輔殿中屋敷裏門前にて駕籠をおろし候に付、駕籠より出で其者の顔を見被申候處、一人は中務大輔殿にて門内へ入被申候由。則御客衆の内口々に咄にて意安老へ、養安院にて候か直に被尋候へば打笑居被申候。御養父玄蕃頭殿も不行狀に付、隠居被仰付由に候處、其御息として不

愼至極、何と仕たる風俗に罷成候やと取々御申候事。

都て十萬石以上の御大名方に、此類七人有之、七人衆と申候旨候處、嶋原城主松平主殿頭忠刻以下の衆を入候へば、十六七人に及候旨被申候方も御座候。

右の件には當八月以來御出入の内、御心安衆二三輩密々に御申聞候筋故、態と其衆中の交名は書載不申候。某一人にては無覺束候に付、與高島善大夫申談じ、兩人にて承請候事共を書記候。尤相違の事も可有之候。種々あらぬ風説は省之候。

儲君御尋に付、十一月廿二日一冊に調之、村田半助を以て上之候其草案也。

一、朝鮮人撰漢壽亭侯關公廟記

見通俗三國志首卷 關 撰者姓名。

余往年赴燕都、自遼東至帝京數千里。名城大邑及閭閻衆盛處、無不立廟宇以祀漢將壽亭侯關公。至於人家、亦私設畫像掛壁。置香火於其前飲食必祭。凡有事必祈禱。宦員新赴任者、齋宿謁廟甚肅虔。余怪之問於人、不獨北方爲然。在在如此。遍天下云。萬曆壬辰。我國爲倭賊所侵國幾

亡。天朝發兵救之。連六七載未已。丁酉冬。天將合諸營兵。進攻蔚山賊壘不利。戊戌正月初四日退師。有遊擊將軍

陳寅。力戰中賊丸。載還漢都調病。廼於所寓崇禮門外山麓。創起廟堂。一座中設神像。以奉關王。諸將揚經理以下

各出銀而助其費。我國亦助之。廟成。上亦往觀之。余與備邊司諸僚隨駕。詣廟庭再拜。其像塑土爲之。面赤如重棗。鳳目鬚垂過腹。左右塑二人持大劍待立。謂之關平周倉。儼然如生。自是諸將每出入參拜。皆曰爲東國求神助却賊。

五月十三日大祭廟中云。是關王生日。若有雷風之異則神至矣。是日天氣清明。午後黑雲四起。大風自西北來。雷雨並作。有頃而止。衆人皆喜曰。王神下臨矣。既而又於嶺南。安東

星州二邑建廟。安東則劉石爲像。星州土塑。而星州甚著靈異之跡云。未幾倭酋關白平秀吉死。倭諸屯悉皆撤去。此亦

理之難測者也。豈偶然耶。昔苻堅入寇。晉謝安以旌節旗鼓禱於蔣子文廟。謝玄以八萬偏師。勝強秦六十萬。說者皆以爲神助。况關王以英雄剛大之氣。其扶正討賊之志。貫萬

古如一日。死而不滅。安知無神應乎。嗚呼烈哉。京師廟前立二長竿。懸兩旗。一書協天大帝。一書威震華夏。字大

如椽。因風飄拂半空。遠近皆仰而見之。其帝號亦皇朝所追崇云。可見其尊崇之至也。

一、青地禮幹夢得的一首

八月十二日某夢得和歌一首

山高みふもとの野邊に咲つゞきくの白露幾世經ぬらん  
一、荻生徂徠可成記抄錄

周防の國に菅家の祠を始めて造れるあり。それに畫像あり。髭ことの外に生じて威嚴なる相のよし孝孺語りき。まことの御形なるべし。

神代と云ことは、死たる人を神にまつりたれば、今は神にまつりたる人の代と云ことなるべし。神武帝の時云る詞なるべし。

烏帽子は弁の遺制なり。朝鮮より傳たるべし。風折と云こと朝鮮より云るとなり。詩經に側弁と云る、ひらを横にしてかぶりたるを云。今の烏帽子をかぶる様なり。

露路と云は、やねふかぬ地を云を、誤りて庭のことにしたるなり。磯をいそとよむ。磯なるべし。いそはいしなり。石の上を